

研究ノート

カトマンドゥのブラムチャリ
 ——その宗教的遊行楽人の性格と実態——

鈴木道子

Research Note on *Brahmacharis* of Kathmandu
 ——**The Nature of Juvenile Religious Itinerant-Musicians**——
A Report on the Ethnomusicological Scientific Research in Nepal, 1982,
Financially Supported by the Ministry of Education of Japan

Michiko Suzuki

There were five pairs of *Brahmacharis* and one independent *Brahmachari* of ages from 12 to 20 in Kathmandu in Summer, 1982. They recite religious epics such as *Ramayana*, *Krishna Charitra*, etc., with the accompaniment of *ektar*, single-stringed musical instrument. Each one of them had left home when he was seven or eight either with the intention of becoming *Brahmachari* from the beginning or as the result of the failure in passing the initiation rite, *Vratibandha*, which had forced him into the sentence of 12-year exile. The life and background of *Brahmacharis* are discussed in this research note.

I. はじめに

筆者は、1982年7月から9月にかけて、文部省科学研究費助成金による海外学術調査「ネパール民族音楽学術調査」（研究代表者 藤井知昭国立民族学博物館教授）に、研究分担者として参加した。本稿は、その現地調査の際に調査対象の一つとなった首都カトマンドゥのブラムチャリと称せられる若き行者についての研究ノートである。（本稿では原則として固有名詞等に関し、ネパール語表現を用いたが、サンスクリット表記をしている場合もある。）

今回の調査対象としたネパールは、ヒンドゥー教文化、チベット仏教（ラマ教）文化、および土俗文化が交錯する地域であり、文化の交流と変容を研究する上で重要な課題を含んでいる。従来、殊に、民族音楽の分野では本格的調査がほとんどなされていないという現状に基き、当該地域の諸民族の音楽・芸能・口誦文芸の文化人類学的調査により、諸民族の行動様式や感情表現の実態を捉えて、音楽行動を伴う文化変容の課題を解明することを目的とした。ネパールは、同調査隊が1980年度の科学研究費助成金によって行った「北パキスタン・西北インド民族音楽学術調査」の調査対象地と隣接する地域であり、文化の伝播と変容を比較考察する上で、当初より種々のテーマを浮上させていた要衝である。例えば口誦伝承の側面からいえば、ヒンドゥー教を背景とした「ラーマヤナ」や「マハーバー

II. 6組のブラムチャリ

ブラムチャリ調査記録一覧

No.	氏名(年齢)・出身地・現住所	家を出た動機・過程	修業および弾き語りの修得経過
1	Hari Sharma Nepali (20) Tika Prasad Nepali (12) 現在は Nepali の姓を名のっているが元来の姓は Gautam. 出身地 Chauri-Panchayat, Kabhre-Palanchok, Bagmati. 現住所 Bhaktapur (月15 Rs で間借り)	Hari = 8才の時、神の恩恵を求め <i>Ramayen</i> と <i>Krishna</i> を覚えることを目的として家を出た。 Tika = 動機は不明。8才の時(3年前)から Hari と行動を共にし始めた。	Pashpatinath の Guru (師) から <i>Krishna</i> を、Trishuli Devighat の Guru から <i>Ramayen</i> を学び、各々6ヶ月位で修得。Guru の名前は知らない。Guru も楽器 <i>ektar</i> を用いる。 Tika は Hari について学び、半分位修得した。
2	Thakur Prasad Gautam (18) Bharat Prasad Gautam (17) 従兄弟関係 出身地 Kartike Deurali, Deurali Panchayat, Kabhre-Palanchok, Bagmati 現住所 Dattatreya Mandir, Bhaktapur (2年前から)	各々8才と7才の時、家を出た。動機は確認されていないが、頭初からブラムチャリを志したと推定される。	寺名・地名(師の名)一期間一内容 Devi Ghat (Ram Nath Guru), 1年, 旋律と歌詞を学ぶ Trishuli Ghat (Jiv Nath Guru), 6ヶ月 Hitauda (Lakshmi Prasad Guru), 1½年 Pashupatinath (×), 1½年 Dakshinkali (Narayan Nath Guru), 6ヶ月 Budhanilkant (Krishna Prasad Guru), Bhaktapur (×), 2年, 現在に至る
3	Krishna Prasad (13) Hari Prasad (14) 従兄弟関係 出身地 Mahendra Pul, Batlechaur, Kaski, Gandaki. 現住所 Dattatreya, Bhaktapur 無賃寄宿	各々7才と8才の時、ブラタマンの儀礼の際にオジをつかまえそこなって直ちに12年間の放浪の旅に出された。12年間は絶対に帰宅を許されない。 2年かかって Kathmandu まで来た。	ブラムチャリになったのは4年前から。師はなく、 <i>Ramayen</i> の本を読んだり、ブラフマンの説教や他のブラムチャリの弾き語りを耳で聞いて独学。
4	Krishna Prasad Chaulagai (21) Devi Prasad Chaulagai (16) 兄弟関係 出身地 Pokari, Keurani-Panchayat, Dhulikhel, Kabhre-Palanchok, Bagmati. 現住所 Bhairava-Sthan, Bhaktapur.	各々が13才と9才の時、父の死亡と共に家計が困窮したため、第2妻の子である2人は自立を迫られて家を出た。その時点で既にブラムチャリを志す。今もダサインなどの大祭には帰郷する。 金を貯めたら、家へ帰る予定。	寺名・地名(師の名)一期間 Bhaktapur, Dattatreya (Bal Krishna Guru), 2年 Dakshinkali (Bhavanath Guru), 3年 Pashupati (Giri Guru) 1年 Budhanilkant (×), 1年 最初の1年3ヶ月間位は下働き、その後、Guru より語り方を教えられた。Guru も <i>ektar</i> を持っていた。
5	Devi Prasad Gautam (16) 両親と3人の兄弟がいる 3年間就学・中断 出身地 Gunikhola (Panchayat ?), Syanja, Gandaki. 現住所 Dattatreya, Bhaktapur.	9才の時、ブラタマンの儀礼の際、7歩マンダラを歩むべきところを8歩進んで、儀礼をとりしきっていた Upadhyaya Bahun により12年間の放浪を宣告された。その場で直ちに追放され、さまよっていると4日目に兄が40 Rs と米を届けてくれた。	<i>ektar</i> のことは、Kaski で Jogi (カースト) がやっているのを見て知った。その後、歌詞は本で覚え、 <i>ektar</i> は独習。 滞在した場所——Dang, Deukhuri, Rapti, Karnari, Baglun, Bener, Karkineta, Budhanilkant (3日間), Pashupatinath (Krishna Prasad Guru, 15日間), Dolakha, Ramechap, Charikot, Okhaldhunga, Bhojpur.
6	Rohin Prasad Gautam (21) Bal Krishna Gautam (17) 従兄弟関係 出身地 Wolim, Naudanda, Satana Panchayat, Kaski, Gandaki. 現住所 Dattatreya, Bhaktapur.	各々10才と6才の時、ブラタマンの儀礼の際に追放された。最初の2年間は茶屋などで働きその後、ブラタマンに臨席した Guru に教えられてブラムチャリとなる。 12年後、父母に供物を捧げて、受け入れられれば家に帰ることができる。	Pokhara で2人の先生 (Champa Giri* と Sukudev Giri) に出会い共に歩く。但しこの2人は <i>ektar</i> を持っていない。 3年前 Kathmandu に着き、2人の Giri はインドへ行った。 歩いた地域——Dang, Deukhuri, Humla, Jumla, Doti, Dailekh (以上 Pokhara の西) Charikot, Ramechap, Okhaldhunga, Bhojpur, Swauth, Narayani-devighat (以上 Pokhara の東), Pashupati (2年間), Budhanilkant (1年間), Dakshinkali (1年) (以上 Kathmandu 盆地) *Giri とはカーストを離れた世捨人 <i>san-yasi</i> の中の一つの姓

1982年8・9月(科研費による「ネパール民族音楽学術調査」の一部)

収録およびレパートリィ	楽器 ektar, その他の情報
8/27 ○ <i>Bal-kand</i> および <i>Ayodhya-kand</i> (連続したもの) 8/28 ○ <i>Krishna Jivani</i> 8/30 ○ <i>Arjun Git</i> および <i>Garbh-vas</i> (<i>Garbh-vas</i> は <i>Arjun Git</i> の中に挿入されている) ○ <i>Pashu Upakar</i>	○ 同じ村出身のブラムチャリは他にはいない, という。 ○ 2人共各々の ektar を持っている。Hari は5年位前に村人を作ってもらったという ektar を使用していることから, 時には帰郷すると考えられる。Tika の ektar は家を出た時以来使用のもの, 少々皮に破れがある。
8/29 ○ <i>Ramayen Charitra</i> ○ <i>Krishna Charitra</i> , ○ <i>Garbh-vas</i> , 他のレパートリィ ○ <i>Arjun Git</i> ○ <i>Pashu Upakar</i>	○ ektar は1本で, 4年前村の人に作ってもらったもの。 ○ Guru たちは必ずしも ektar を持っているわけではない。 ○ 4年位修業の後, ブラムチャリとして稼げるようになった。現在1日平均50 Rs 位の収入。
8/30 ○ Ram が家を出てから Sita がさらわれるまで ○ <i>Babu Le Chori Mareko</i> 他のレパートリィ ○ Krishna の父の結婚から Krishna が Gokula へ着くまで ○ <i>Kis-kand</i> (= <i>Kiskindhakand</i>)	○ 2人は各々, 1~2年間就学してそれを中断している。 ○ ektar は1本で, 4年前, Bha-ktapur の太鼓屋で新品を70 Rs で買ったもの(ワニ皮張りだが破れがひどい)。
8/31 ○ <i>Ram Charitra</i> (<i>Bal-kand</i> に内容的に等しい) ○ <i>Krishna Charitra</i> 他のレパートリィ ○ <i>Arjun Git</i> ○ <i>Pashu Upakar</i> ○ <i>Garbh-vas</i> ○ <i>Babu Le Chori Mareko</i>	○ ektar は1本で, 4年前, 村の人に胴を作ってもらい太鼓屋で皮を張り, 他は自分で作った2台目のもの。 ○ ブラムチャリとしては最年長だと自認している。
9/1 ○ <i>Ramayen</i> (<i>Charitra</i>) ○ <i>Krishna Charitra</i> (共に繰返し部分のないシンプルなうたい方) 他のレパートリィ ○ <i>Pashu Upakar</i> (少々) ○ <i>Garbh-vas</i> (〃) ○ <i>Babu Le Chori Mareko</i> (〃) (<i>Arjun Git</i> はできない)	○ 最初の ektar は Dang の地でただでもらい4年間使用。 ○ 現在の ektar は, Budhanilkantth で胴のみを14 Rs で買い, ヤギ皮を5 Rs で買って4 Rs で張ってもらった。棹は自分で付けた。 ○ 現在も Pashupatinath へ通っているが ektar を持った Guru がおらず, 説教ばかりであり練習にはならない, という。
9/3 { ○ <i>Ramayen</i> (<i>Ram Van Vas</i>) ○ <i>Krishna Charitra</i> ○ <i>Babu Le Chori Mareko</i> * { ○ <i>Ghanse Git</i> (東方山地の Chhetri の草刈り唄) ○ <i>Asare Git</i> (山地 Bahun や Chhetri の田植え唄) その他のレパートリィ ○ <i>Arjun Git</i> ○ <i>Pashu Upakar</i> ○ <i>Garbh-vas</i> * 何か民謡を知ったら歌え, というこちらの要望に応じて歌ったもの。なまりが強く翻訳は不能であった。	○ ektar は2本使用, 各々, 作られてから2年と3年を経たもの(最初のもものは欲しがる外人に売った)。 ○ Pokhara より西におけるブラムチャリの演奏法と語り方が異なるとのことで, その例を示した(詳細は本文)。

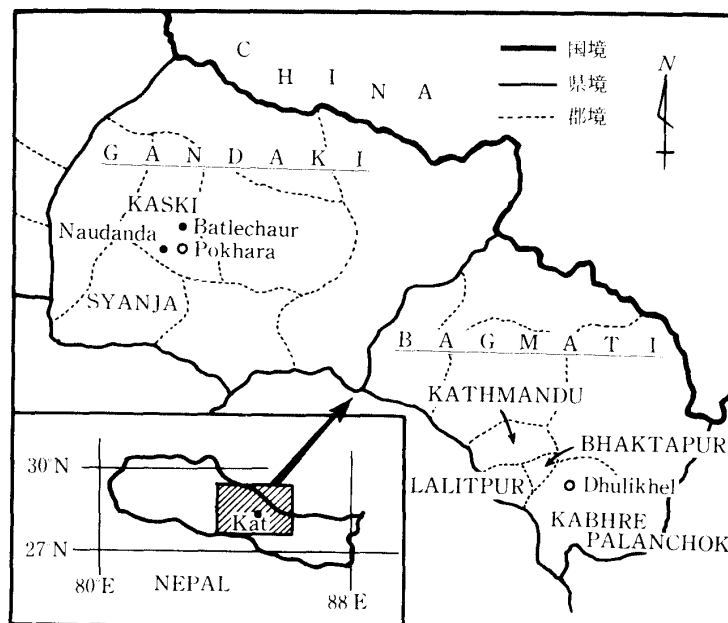
ラタ」の叙事詩が, どのような内容的・形態的ヴァリエーションを伴って仏教文化と併存しているか, あるいはまた, チベット仏教文化圏を中心にモンゴルや中央アジアにまで伝承の広がる「ケサル英雄叙事詩」が, チベット系の諸民族をマイナーな存在とするネパールにおいて, はたしてどれだけ, フォークロアとしての実態をもっているかが, ネパールの30を超える言語・民族集団に対峙するにあたっての主要な調査項目の一つであった。それぞれに関して, 一定の調査成果が得られたと考えられるが, 本稿では, ヒンドゥー教の二大叙事詩のネパール的大衆化の一事象として, 一弦琴エクター ektar をもって叙事詩を弾き語るブラムチャリの実態を, 現地で得た一次資料の紹介を主軸に検討してみたい。

ブラムチャリとは, サンスクリット語のあらたまった形で言えばブラフマチャーリー *Brahmachārī* であるが, ネパールの巷間においてはブラムチャリ(またはブラムツァリ), 時にはバルムチャリ(またはバルムツァリ)と称せられている。東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の石井溥氏の御教示によれば, ブラフマチャーリーはブラフマチャールヤ Bra-

hmachārya, 即ち結婚前の禁欲的な修業の時期 = 「梵行期」もしくは「学習期」の状態にある者という意味から、「梵行者」、「梵行期中の者」等の訳語が与えられているとのことである。実際には、後述する成人儀礼ブラタバнда Vratibandha, もしくはウパナヤナ Upanayana を8才前のブラーフマンの男子が儀礼の規定通りに通過した後、正式にブラーフマンのカーストの身分が与えられ、ブラフマチャーリーと称せられる⁽¹⁾。そして、ブラーフマンの本来の儀礼の形態に則るとすれば、ブラフマチャーリーとなることを機に師 guru との緊密な関係が成立し、儀礼の3日目で真言^{マントラ}が与えられて真にけがれのない、しかも結婚も可能な状態で生れかわって所謂「再生族」となるまでの学習期間にある者を正確には指すことになるようである⁽²⁾。

しかし、調査隊が今回ネパールの首都カトマンドゥで調査したブラムチャリは、同じ思想的・宗教的・儀礼的背景をもちながらも、ネパールにおけるカースト制度の変容を象徴するかのごとく、儀礼の一過程からは独立した特異な行動体系と、微小ながら職能集団と言って差しつかえないような歴然とした連帯を形成していた。彼等の存在は、ともすれば、観光客目当ての乞食楽人として受け取られかねない様相を呈しているが、それだけに従来調査の対象となることが無く、彼等に関する文献も皆無と言える状態の中で、1982年の8・9月の時点において、カトマンドゥに現れるブラムチャリのほぼ全員を調査できたということは、一つの特筆すべき成果であったと思われる。現在そのデータを整理した段階では、調査漏れが多々発見できるが、それらは徐々に今後の調査で穴埋めするとして、ネパールのフィールドワーカーである諸兄諸姉に種々の御指摘を頂くためにも、次章にブラムチャリに関する現地調査記録一覧を掲げる次才である。尚、当件の調査に使ったインフォーマント兼通訳は、Lalitpur (Patan) の高校生 Yesh Kumar Shilpakar (19才、ネワール族) で、家は代々象牙細工屋、祖父の語る「ラーマヤナ」や「マハーバーラタ」を始めとする物語を聞いて育ち、日本語が少しできた。(紙幅の都合上、II章は前頁)

ムラムチャリの出身地



III. ブラムチャリの背景－II章の解説

1. 成人儀礼ブラタマン

II章の「ブラムチャリの調査記録一覧」における6組、正確には5組と1人のブラムチャリは全て、バウン Bahun のカーストの出である。その中で、No.5は、彼等の言い方によればウパダディ・バウン、正式にはウパダヤ Upadhyaya バウン、No.3・4・6はジョシ Joshi（正式にはジャイン Jaisi か？）バウンの者であり、No.1と2はサブカーストが確認されていない。バウン、即ちブラーマンはチェットリ Chhetri（クシャトリアのなまったもの）とならんで、近代ネパール王国形成の過程で支配的役割を果たしてきた⁽³⁾。かつてはその人口がネパール中西部に集中していたが、現在では国中に広がり、主産業は農業と官吏であるが、ヒンドゥー教の司祭（家付き司祭）を務めるのも当然彼等である。世帯単位や共同体単位の宗教儀礼に関わって仕事をする。調査対象となった11人のブラムチャリは、偶然か必然的にかは不明であるが、カトマンドゥと同一アンチャル *anchal* (県)内にあるカブレ・パラチョク・ジッラ *jilla* (郡)出身の者と、ヒマラヤのベース・タウンであるポカラが位置するガンダキアンチャルのポカラ周辺地域出身の者に分れ、確認されていない部分もあるが、そのほとんどの生家の家業は農業である。

彼等が7・8才の幼年期に家を出て現在のブラムチャリと称せられる状態に至った過程には、一覧が示すように2種類のタイプがあった。当初からブラムチャリになることを志したタイプ (No.1・2・4) と、ブラタマンの儀礼、所謂通過儀礼を通過しそこなった結果として家を強制的に出され、しかも12年間家に帰るなという宣告を受けて放浪の末、ブラムチャリという一種の職（身分）を得たタイプ (No.3・5・6) である。いずれにしても、バウンカーストの者であるからブラムチャリになることができたと考えられるが⁽⁴⁾、カブレ・パラチョク出身のブラムチャリは前者のタイプに属し、ポカラ近辺の出身者は後のタイプに属するという奇妙な符合を見せている点は、単なる偶然の一致か否か問題になるところであろう。

ブラタマンは前出の石井氏の御教示によれば、文語表現（サンスクリット語）であるヴラタバンダ Vratibandha のなまったもので、ネパール語の口調ではブラタマン、時にはバルタマンと聞こえる。同じくサンスクリット語でウパナヤ Upanayana とも称せられる儀礼である。ヒンドゥーのブラーマン、クシャトリア、ヴァイシャの3高カースト、所謂再生族 Twice-born の男子が、それぞれのカーストによって定められた年令までの間に師の教えと聖なる紐 sacred-thread を授けられ、剃髪してそれまでのよりけがれた状態を脱し真の再生族として、各々のカーストの一員として、正式に認められるようになるための儀礼である⁽⁵⁾。ネパールにおいても、これら3カーストに相当するものとされるブラーマンやチェットリ、ネワール族の人々の間で、それぞれ多様な手続きを伴ってブラタマンの儀礼がとり行われているようである⁽⁶⁾。ネワール語ではケーター・プジャ「禪の儀礼」と称して、15才位までの間にガネシュ寺院の前で行われる旨が、石井氏の報告にある⁽⁷⁾。同じネワール族でも、仏教僧カーストのグバジュ（ネパール語でヴァジュラチャルヤ Vajracharya）はバレ・ツイグと呼ばれる、僧侶になることを象徴した成人儀礼を行うことを、同氏より教示された⁽⁸⁾。

ブラタマンの際に12年間の追放を宣告された直接の経緯を示しているのは、ブラムチャリのNo.3とNo.5である。彼等がどのような形式のブラタマンを体験したのか、その詳細は必ずしも明確とは言えないが、彼等の言葉を再構成してみるとヒンドゥー寺院（主としてガネシュ寺院）の前でグルやバウン（ブラーマン）が7つのマンダラを書き、親類縁者の見守る中、儀礼を受ける子供がその7つのマンダラを踏み、最後のところでオジを掴えればめでたし、という部分がブラムチャリの誕生と最も深い関わりをもつことがわかる。この場合の7つのマンダラが何を意味するのかは未調査であるが、文献によっては、「水で路面に、7つの大海を象徴する7本の線を描く」とあり⁽⁹⁾、ネワールのケータ・プジャでは、「ガネシュ寺の前でバルム（＝ブラーマン）が黄と赤の線を引く」とある⁽¹⁰⁾。いずれにおいてもここで、自分の意志もしくはグルの命によって（前者の場合、ベナレスへ）修業に出かけるところが模擬されるのである。

この擬装出家は、成人式において少年が家族や縁者を捨て宗教的な禁欲生活に入ることを象徴するものである。それが、ネワールのケータ・プジャの場合のように、待ち構えていた母方のオジが引き止めることによって中断されようと、ブラムチャリの少年たちが語ったように、自らオジ（恐らく後述の理由でこの場合も母方のオジ）を掴まえることによって中断されようと、模擬行為の意図には変りがないであろう。即ち、石井氏が指摘されるように、ここにおいて成人するために必要な修業を無事終了したことになると考えられるのである。母方のオジは、自分の娘を少年の嫁に差し出すという条件まで提示してベナレス行きを思い止まらせようとするインドの事例が文献⁽¹¹⁾にあることから、交叉イトコ婚 *cross-cousin marriage* の習俗的背景がブラタマンには関与しているのではないかと思われるのだが、実際には、ネパールの高カーストにおいてはタクリ（チェトリの一部）しか交叉イトコ婚を行わないようである⁽¹²⁾。厳しい父のイメージの外延にある父方のオジに対して、優しさを代表する母の兄弟が、出家しようとする少年を抱き止めることに、あまり理屈を考えない方が良いのかも知れない。

母方のオジがいない場合はどうするのか、という問に対して、ネワール人のインフォーマントは、「代理を立てる」と答えた。彼自身、ブラタマンで失敗して実際に12年間の放浪に出されるという例があることを、調査隊と共に仕事をして初めて知ったのである。他のネワール人のガイドや通訳に聞いたとしても、やはり同じで、ブラムチャリという一弦琴をもって「ラーマヤナ」等を弾き語る、一種の門付人の存在は知っていても、それとブラタマンの儀礼との関連は知らなかった。田舎にはそうした儀礼に対してより厳格な態度が残されているのであろう、という極めて一般的な解釈が出されたが、今後の再調査が大いに待たれる部分である。オーに、ポカラ周辺におけるブラタマンの行われ方の特性が問題となろう。貧困による口べらしの方便にされているのではないかという視点からもインタビューを試みたが、5名のブラムチャリ自身からは、否定も肯定もしかねる答えしか得られなかったのである。

2. ネパールのラ（一）ムとクリシュナ

ブラムチャリたちが弾き語る曲目は大別して3つある。「ラーマヤナ」を素材としたもの、「マハーバーラタ」に関連したもの、および説教歌に類するものである。しかも、調査したブラムチャリに関

する限り、それぞれの曲目と内容は限定されたものであり、上手下手、詞が十分記憶されているか否かの違いはあるにせよ、詞自体はほとんど共通するものであることが、録音テープをおこして訳する段になり判明したのである。

「ラーマヤナ」は、ネパール語では「ラマヤン Raraya (又はe)n」と称せられ、ラーマはラ(一)ム Ram と呼ばれることが多い。ヴァールミーキーが集大成したとされる「ラーマヤナ」は7巻からなり、それぞれのサンスクリット語を転写すれば次のような構成となる。Bk. i.= *Bāla-kānda* ('Childhood Section'), Bk. ii.= *Ayodhyā-kānda* ('Ayodhyā Section'), Bk. iii.= *Aranya-kānda* ('Forest Section'), Bk. iv.= *Kiskindhā-kānda* ('Kiskindhā-Section,' ラーマと猿軍が同盟する巻), Bk. v. = *Sundara-kānda* ('Beautiful Section,' 猿ハヌマーンの活躍の巻), Bk. vi.= *Yuddha-kānda* ('Battle Section,' ラーマとラーヴァナとの闘いの巻), Bk. vii.= *Uttara-kānda* ('Last Section,' シーターが帰国した後の巻)⁽¹³⁾。この中で、ブラムチャリがレパートリィとしている曲目は、調査記録一覧で示されているように、「バル・カンド *Bal-kand* (ネパール語表現, 以下同)」と「アヨダまたはアヨドヤ・カンド *Ayodhya-kand*」が主流を占め、稀にNo.3の場合のように、「キス・カンド *Kis (= Kiskindhā)-kand*」がレパートリィに挙げられていることもある。内容的には、ラーマが誕生してからシーターを勝ち取り、義母の奸計に会い14年間のアヨダ国からの追放を言い渡され、シーターと弟ラクシュマンとを伴って森へ隠遁するまでの物語である。この同じ内容が、曲目の上では「ラーマヤン・チャリトラ (ラーマ王一代記)」とか、「ラーマ・チャリトラ」とか、あるいは単に「ラーマヤン」と題されることがあり、No.6の場合の場合のように、「ラーマヤン」が *Ram Van Vas* と限定されて、「ラーマが森に住む (に至るまでの話)」として語られることもあるのが判明したのである。

次に、「マハーバーラタ」に関連した物語は、もっぱらクリシュナを主人公とした物語に限られる。クリシュナの誕生にまつわる話と幼年期を扱った「クリシュナ・チャリトラ (またはジヴァニ) *Krishna Charitra (Jivani)*」, 「マハーバーラタ」の中心人物アルジュン (サンスクリット語ではアルジュナ *Arjuna*) をクリシュナが励まし諭す話 (訓誡) 「アルジュン・ギート (タ)⁽¹⁴⁾ *Arjun Git(a)*」, および後者の中に含まれる内容の一部でありながら半ば独立したガルブ・ヴァス *Garbh-vas*」, 即ち母親の妊娠の苦しみをうたったもの, 以上の3種がレパートリィとして挙げられている。「アルジュン・ギート」は明らかに、ヴィシュヌ神の化身であるクリシュナとアルジュナとの対話からなる「バガヴァド・ギーター」を下敷にしたものであろう。

以上、ブラムチャリの曲目とサンスクリット語原典の項目との対応関係を列挙してみたが、実際は、ブラムチャリたちはネパール語で弾き語りをしているのであり、しかも、その詞がブラムチャリによって大した差異を見せていないことが判った現段階では、ネパール語による原本 (テキスト) の存在の有無を確かめることが必須となる。これは今後の課題となろう。サンスクリット語やインド諸語による作品がネパール語に翻訳され初めたのは、文学史で見るとあまり古いことではない。一般的には19世紀を遡らないと考えられるが、但しここには、プライベートな写本の類が含まれないため、ネパール語のテキストの原点をここ二世紀の間に限ることは危険を伴うであろう。ただ、ネパールの人々の、インド2大叙事詩に対する理解もしくは親しみ方の歴史を知る一つの資料として文学史を捉えるなら

ば、支障はない筈である。

Abhi Subedi の *Nepali Literature : Background & History* によれば、バーヌバクタ・アーチャールヤ Bhanubhakta Acharya (1814-1869) or (1814-1889) or (1871-1925)⁽¹⁵⁾が1841年にヴァールミーキーの「ラーマーヤナ」の「バル・カンド」を訳し、10余年後にその完訳を果たした。これが詩人でありかつネパール人の最初の出版業者とされるモティーラム・バッタ Motiram Bhatta (b. 1866) によって出版されたのは1887年、ベナレスの印刷所からであった⁽¹⁶⁾。ネパール詩の確立者といわれるバーヌバクタと評論家のさきがけでもあったモティーラムの結びつきにより、ネパール語は文学用語としても一人立ちし始めたと考えられるのである。もう一つ特筆しておかなければならないことは、北インドのヒンドゥー教徒たちの日々の暮らしと宗教生活に深く融け込んだトゥルシー・ダース Tulasi-Dasa (1532- ca. 1623) のラーマーヤナ「ラーマチャリット・マーナス Rāmacharita-mānasa」のネパール語訳である。これは、クルチャンドラ・ゴウタム Kulchandra Gautam (1875-1958) によってなされた。また、バーヌバクタの時代には散文で膨大な量の「ラーマーヤナ」が書かれている。

クリシュナの物語に関していえば、文学史上は「ラーマーヤナ」よりも早くからネパール語で韻文化されているようである。19世紀初頭にはバサンタ・シャルマ Basanta Sharma が「クリシュナ・チャリトラ」を書いてネパール初の叙事詩と評され⁽¹⁷⁾、タライ地区出身のヤドゥナート・ポカルヤール Yadunath Pokharyal (b. 1833) の「クリシュナ・チャリトラ」は、ネパール語による最初の英雄叙事詩と目された⁽¹⁸⁾。その他、バーヌバクタの流れを継ぐホムナート・カティワラ Homnath Khatiwara (1854-1891) など、数多くの詩人が「クリシュナ・チャリトラ」を物している。

さて、ブラムチャリの弾き語る詞が、以上に挙げた詩のいずれかを典拠としているのかという問題になるが、テキストの有無さえ確認されていない段階では断定はかなわない。文化的・宗教的伝統と背景から見て、少なくとも、ネパールで日常語られている「ラーマーヤナ」が、ヴァールミーキーの「ラーマーヤナ」でなく、トゥルシー・ダースのそれである可能性の方が大であると考えことは差しつかえなからう。しかし、それ以上に強く推測できることは、先に記したような文学的叙事詩の下敷ではなく、より日常的な生活のレベルで親しまれている物語詩や説教詩の存在が、ブラムチャリの存在そのものを支えているのではないかということである。ブラムチャリが語った詞のひとつおりの訳を本文末に掲げておくが、それを見ても判るように、「ラーマーヤナ」に関連したもの、クリシュナに関連したもの、そのいずれにおいても、詩行の内容の一貫性に欠けるところがあり、語り手自身の記憶の不十分さも手伝って、叙事詩のさわりとためになるお話を聞かせるという、いかにも門付芸的な性格を濃厚に漂わせているのである。

尚、一曲あたりの所要時間は10分前後から4・50分に及ぶものまで、ブラムチャリ一人一人の習熟度と曲目によって大差があるが、いずれにしても、調査においては途中でストップをかけることなく、これ以上は知らないという箇所まで語らせた。その中で、単語一語一語が比較的明瞭に聞き取れ、しかもある程度まとまった量を語っているものを一つずつ取り出して訳したのが本文末の訳文である。上手下手の程度には勿論個人差があるが、概して、最初からブラムチャリを志した者の方が、記憶の分量、レパートリーの広さ、技術等においてより優れていたことを付記しておく。

レパートリィの3番目に挙げた説教歌に類するものにおいては、不明部分が多い。曲目としては、「パス・ウパカル *Pashu Upakar* (肉食を戒める動物からの声)」と「バブ・レ・チョリ・マレコ *Babu Le Chori Mareko* 『父が娘を殺した(話)』」の2曲が分類されよう。前者は10分程度にまとまった詞であり、これも矢張りテキストをもつものと考えられる。後者は1977年に実際に起った事件を題材にしている。これを4組のブラムチャリがレパートリィに挙げた (No.1とNo.2は、知っていると言わなかった可能性がある)。4組の内、No.3とNo.6に語らせたが、詞はほとんど同一であった。しかもこの後で、ガィネ (ネパールの専業楽人カースト) の男が、詞・曲共に自作であるとして「バブ・レ・チョリ・マレコ」を歌ったが、矢張り、数字などの細かな部分を除いて、ブラムチャリのそれと全く同じものであった。この歌のオリジンがどこにあるのかは、目下不明である。

こうした選曲の実際を知るに及んで浮上してくるのが、ブラムチャリの伝承組織の有無、あるいは共通した学習や情報交換の場の有無である。4組のブラムチャリがバクタプールのダタトゥレヤ・マンディール寺院を現在の住みかとしているようであるが、彼等の性格上、毎晩そこに戻るとは限らない。しかし、そこがブラムチャリの昔からの恒常的な寝泊りの場所であるか否かは聞き漏らした。こうした彼らの行動体系に関しては、まとめの段階でいさ少し論じてみたい。

3. 一弦琴エクタール

ブラムチャリたちが抱えている一弦琴エクタール *ektar* は、極めて単純な構造の楽器ではあるが、ある意味では、ブラムチャリがブラムチャリであることをアイデンティファイすることのできる、唯一ともいえる証拠品である。

胴は特に専用のものがあるわけではなく、バター等の食料を入れるための木製ボウル(口径=13・4cm~15・6cm)を代用し、そこへ適当な獣皮(シカ・ヤギ・ワニ等)を張り、6・70cmから90cm前後の棒を通して、針金やギターのコードを一本張っただけの造りである。糸巻きは長い鉄釘を曲げたものであり、駒には小さな木片やガラスのかけらが用いられていた。調査記録一覧にも示したように、皮張りを除いては、ほとんどが彼自身の手作りの楽器であり、壊れたり破れたりすることも多いらしく、比較的新しいものばかりであった。開放弦を爪ではじく奏法で⁽¹⁹⁾、ピッチは各々の声の高さに合わせて歌い易くするということであるが、楽器の構造上、弦の弛み方が速く、始終気にして巻き直している者もあれば、全く無頓着な者もいた。主として2拍子のリズム楽器としての役割以上のことは、音楽的には果していない楽器である。

にもかかわらず、既に述べたように、‘芸人’の持ち物としての重要度は極めて高いと言わざるをえない。エクタールがネパールでの音楽演奏に用いられるという記録や報告は管見の限りでは無く、ましてや歴史も定かではない⁽²⁰⁾。ブラムチャリの師であるグルたちも、必ずしもエクタールを使うとは限らないようである。因みに、No.1のブラムチャリにエクタールを持って「ラーマヤナ」等を語るることのできる者を何人位知っているか、と尋ねたところ、次のような答えが返ってきた。Pashpatinath に30人、Budhanilkant 15人、Bhaktapur の Rammandir に8人、Kathmandu の Rammandir に5人、計58人位。この数字は他のブラムチャリによって確認されていない。他の者は全く知らなかったり、ほんの2・3人の数をあげるにすぎなかったためである。

さて、ブラムチャリとエクタールの結びつきがいつ頃から始まるのかについては、現在のところ、全くの未調査である⁽²¹⁾。ただ一つ考えられることは、「ラーマヤナ」のラーマを筆頭とする行者や隠遁者の古典的なイメージの中にある彼等の持ち物は、弓矢であり、エクタールは現代社会の行者が持つその代替物ではないかということである。しかも、2重の意味で根拠が成立する。即ち、弦楽器の原初的形態は弓または弓と矢であったと一般に考えられており⁽²²⁾、その上この場合、エクタールは弓矢と同様、生きるための糧を得る唯一の道具であるからだ。ネワール人のブラタマンに相当するケーター・プジャにおいては、子供は、「禪をつけ白衣をつけ、スカート様の白いハカマをはき、フチ付きの赤帽子をかぶり、鹿の皮をまるめて棒の先にくくりつけたもの(biccā)と弓矢を持つ」とされている⁽²³⁾。バウンの子供がブラタマンにおいて弓矢を持つか否かは未確認であるが、どちらにしても、ブラムチャリの本来の性格からすれば、エクタールと弓矢を関連づけることは、あまり困難なこととは思われないのである。

もともと楽器は、音を出すことだけをその果すべき機能とするものではない。身体の一部であり、伴侶であり、社会的地位の象徴でもある。一見粗雑で簡素な形をしたエクタールも、更に追究しなければならない課題を多々隠しもっているようである。

IV. ブラムチャリの旋律

ブラムチャリたちが弾き語る詞は、部分的例外を除き全て、2行が一つの節(スタンザ)になっており、通常、意味はそこで完結する。1行は大体において14・5もしくは10前後のシラブルをもち、2行はそれぞれほぼ同数のシラブルで構成されている。エクタールで、ベ・ベーン、ベ・ベーンと拍子を取りながらの語り方には2種類あって、
オ1行を2度繰返してからオ2行でスタンザをしめくくるものと、オ1行の後半を繰返してオ2行目に移るものがある。また、同一曲内で、No.1のブラムチャリの例のように繰返し方を変えることもある。この場合は、詞の形態も変る。しかし、ブラムチャリの曲目全体をながめたとき、曲目の種類によって繰返し方が定まっているとは、現在のところ考えることができない。また、No.5のように、繰返し部分をもたない歌い方もある。ただし、No.5は記憶力や技術の面で一番稚拙であった。

一つのスタンザに対する旋律も、歌い方(繰返し方)に従って2つのパターンがあり、それぞれをPattern I, IIとすると、これがほ

ブラムチャリ 曲 目	旋 律 型
No. 1 Bal-kand	Pattern II* → P. I
Ayodhya-kand	P. I (変形)
• Krishna Jivani	P. II → P. I
• Arjun Git	P. II
• Garbh-vas	
• Pashu Upakar	P. II
No. 2 • Ramayen Charitra	P. II (前奏付)
Krishna Charitra	P. II (")
Garbh-vas	P. II (")
No. 3 Ramayen	P. II
• Babu Le Chori Mareko	P. I (変形)
No. 4 Ramayen	P. II
Krishna Charitra	P. II
No. 5 Ramayen	P. III
Krishna Charitra	P. III*
No. 6 Ramayen (Ram Van Vas)	P. I (変形)
Krishna Charitra	P. I (")
Babu Le Chori Mareko	P. I (")

• 印は APPENDIX に訳有り。
* 最初の1スタンザのみ。
※ Ramayen より半音下がる。

採譜者 近藤一美

Pattern I

1st line

A

A

2nd line

A

a

5~7拍休み
以下繰り返す

Pattern II

1st line

B

B'

B'

2nd line

B

B'

β

3

4拍休み
以下繰り返す

Pattern IIの前奏

1st line

C

C'

C'

2nd line

B

B'

β

3

4拍休み

Pattern III

8 (10) 拍休み

1st line

D

4 (6) 拍休み
以下繰り返す

2nd line

D'

リズム型

平常部分

つなぎの部分

とんどのブラムチャリの旋律型にあてはまることが判った。勿論、ほんの細かい部分で変型が見られ、前奏が付いて主旋律に流れ込む場合もある。次に Pattern I (オ1行を全部繰返す) と Pattern II (オ1行の後半を繰返す), 繰返しのない Pattern III, およびブラムチャリ No.2 だけが Pattern II に付加している前奏部分の譜を掲げておく。尚休符は, おおまかな目安にすぎない。(譜参照)

次に, ブラムチャリの曲目の各々の旋律型を示したのが前の表である。明らかに Pattern II, つまり後半繰返し型の方が多。Pattern I の場合は, 出だしの部分や繰返しのつなぎの部分などに少しずつ変形の見られることが多い。

最後に, リズムに触れておきたい。エクタールを爪引きながらリズムをとっているのであるが, 弦が弛んで音が変わったり, 2人が各々のエクタールを弾く場合, あまりそろわなかったりするるのであるから, 厳密性は要求できない。最も一般的なリズム型を上挙げておいた。

以上, ブラムチャリの音楽面に関する基本的資料だけを扱ったが, 詞の韻律, 韻律と旋律型, 物語の内容と旋律型の関わり等に関しては, 今後の課題としてゆきたい。

V. おわりに

本稿はII章でブラムチャリの調査記録一覧を示し, III章でその解説を兼ねてブラムチャリの文化的背景を述べ, IV章で彼等の弾き語りの音楽的特徴を比較検討することによって, 現象面でのブラムチャリの実態はある程度把握できたと思われる。しかし, ネパールの社会的・宗教的構造の中でブラムチャリとは実際何であるのかという点に関しては, 歴史的はもとより今日的にも, 何一つわかっていないといっても過言ではなからう。人々のブラムチャリに対する一般的理解の仕方においても, わずかな文献から得られるインドの資料を除いたネパール独自の, ブラムチャリという存在の本来の意味にお

いても、共通した確たる見解が目下発見されていないのである。もう少し具体的に言えば、ブラムチャリとは状態を指すのか行為を指すのか、つまり、成人儀礼を機として血縁の絆をたち切り自立した(修業中の)状態にある者を指すのか、エクタールを弾き「ラーマヤン」等を語り聞かせる行為をする者を指すのかが明瞭になっていないのである。

ブラムチャリのNo.1・2・4は最初からブラムチャリになって生活することを目的とした。No.3・5・6は、途中からブラムチャリを知って今日に至り、プラタマンで家を出されてからそれまでの期間はブラムチャリとは呼ばれなかったという点が、問題を複雑にしている。ブラムチャリ、即ちブラフマチャーリーの原義に基く本来の意味や性格を残存させながらも、現象面ではその理解が混乱し、あたかも一種の職業カーストのごとく扱われていると解釈すれば良いのであろうか。儀礼や原義に則したブラムチャリのとらえ方と、今日のカトマンドゥに見られる一般の人々の受け止め方とのずれは、時の経過と共に生じたものか、ネパール固有の特性として元来あったものなのかは、今後の解明を待つしかないようである。No.6が語ったところによれば、パワン以外のマガール族やグルン族のブラムチャリにもポカラの西方で出会ったことがあるという。今回の調査ではカトマンドゥ周辺に目下のところブラムチャリが10人から12人いるという一致した情報に基き、その全員と思われる6組を短期間に調査したのみであるから、更に他の地域にまで調査対象を広げ、あるいはまた、一弦琴を弾き語る者以外にブラムチャリと呼ばれる者がいないかを追究することにより、先の疑問に対する答えが得られるかも知れない。

現象面に視点を戻すとすれば、ブラムチャリの師との縦のつながりと、ブラムチャリ相互の横のつながりとの関連が、興味ある今後の課題として残る。言い換えれば、出身地も年代も異なるブラムチャリたちが同一詞句の同一曲目をレパートリィとするに至った背景には、何らかの伝承組織または仕組みが存在すると考えざるを得ないのである。No.3の場合のように、就学期間2年前後で、「詞は本を^{ことば}買って覚えた」という言葉を「物語を本で知った」という意味に解釈して取り合わなかったことが悔まれるが、それでも尚、何らかの学習の場の存在を否定するわけにはゆかない。幸い、ブラムチャリたちが修業を積んだ場所とグル(師)の名前が調査されている。それらを基に、ブラムチャリの学習過程を具体的に究明することは不可能ではなからう。そしてまた、ブラムチャリを仮に聖なる楽人とするならば、俗の最たるものにガイネ(楽人カースト)がいる。ガイネも「ラーマヤナ」や「クリシュナ」を、サーランギという4弦弓奏楽器に合わせて弾き歌い、中にブラムチャリのレパートリィと全く同じ詞まで歌う者がいるということは、この場合の聖と俗が腹合わせに存在しており、遊行の楽人という生活手段の共通性を媒体とした芸の情報網が張られているのではないかという穿った見方もできるのである。

多民族、多宗教、その上にカースト制度が時代を経るにつれてより複雑に絡み合っているネパールにおいては、一つの儀礼、一つの習俗も人・場所・カーストが異なれば普遍化できない場合が多い。帰納法的調査が有効となる。1982年夏のカトマンドゥで行ったブラムチャリ調査は、そうした調査の一つに過ぎない。しかし、一弦琴を持って「ラーマヤナ」を語る者がいる、という情報を得て、あちらこちらと噂の後を追いかけて始めてから最初の1組を掴めるまでに約1ヶ月近くが経過していた。後は

彼等のロコミによってスムーズに対象が得られたが、地方の都市化や職場の多様化と共に、彼等の存在がどのような影響を受けるかは、これまでのブラムチャリ人口の変化が判明していない状態では予想も困難である。歴史的には後転的なカースト化を経たネパールにおいてはヒンドゥー儀礼も次第に広範に行われるようになって、その所産であるブラムチャリが増加した可能性も考えられる。今は全くの推測にすぎないが、今後の調査を継続させることにより、もう少し普遍的なブラムチャリ像を捉えてみたいと願う次才である。

ネパールには、ブラムチャリやガイネといったヒンドゥー系の遊行楽人に対して、チベット系の人々の間には、現在数は稀少となったが、ラマ・マニ（絵説師）とかドゥン・ケン（叙事詩などの語り部）といった同じく歩き筋の芸人の伝統がある。民族音楽、文化人類学、美術、および筆者が担当する文学の研究者たちによって構成された今回の調査は、楽人や語り部が担った普遍的な社会機能や行動体系までも最終的には解明することを目的の一つとした。ブラムチャリの継続調査は、あくまでもその一環として位置するものと考えたい

（1983年4月）

（註）

- (1) Stevenson, Sinclair, *The Rites of the Twice-Born*, Oriental Books Reprint Corporation, New Delhi, 1920 (1971), pp. 27-31.
- (2) *ibid.* p 38.
Arnold van Gennep (tr. by Vizedom, M. B. and Caffee, G. L.), *The Rites of Passage*, University of Chicago Press, 1960, pp. 104-5.
- (3) Bista, D. B. (田村真知子訳)『ネパールの人びと I, *People of Nepal*, 1967 (1972)』古今書院, 1982年, 22頁。
- (4) ブラムチャリNo.6の報告によれば、マガール族やグルン族のブラムチャリもポカラの西には居たということである。V章でこの件に触れておいた。
- (5) Stevenson, *op. cit.*, 'The Sacred Thread.'
- (6) 石井博「㊦1. 儀礼表」『ネパール村落の社会構造と其の変化——カースト社会の変容——』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, アジア・アフリカ言語文化叢書 14, 1980年, 295頁。
- (8) Cf., Greenwold, S. M., 'The Role of the Priest in Newar Society,' *Himalayan Anthropology, The Indo-Tibetan Interface* (ed. by James F. Fisher), p. 501.
僧になるためのイニシエーションの儀礼として *diksha* のことが述べられているが、ウラタパンダと性格ややり方が類似している。
- (9) Stevenson, *op. cit.*, p. 41.
- (10) 石井, 前掲書, 295頁。
- (11) Stevenson, *op. cit.*, p. 41
- (12) Bista, *op. cit.*, p. 32.
- (13) Cf., Hastings, J. (ed.), *Encyclopaedia of Religion and Ethics*, New York, 1918 (1971).
- (14) ネパール人が「ギータ」という場合は、「アルジュン・ギータ」や「バガヴァド・ギータ」のことを指し、「ギータ」と言う場合は一般の詩・歌の意味だ、と語った者もいたが、ネパール語としては「ギーター」でなく「ギート」で統一されるべきだろう。
- (15) 生没年が文献により異なり、いずれが正確な数字かは未確認である。数字は順に次の文献からとった。
Subedi, Abhi, *Nepali Literature : Background and History*, Asian Printing Press, Kathmandu, 1978, p. 27.
Varma, R. S. (ed.), *Culturoal Heritage of Nepal*, Kitab Mahal, Allahabad, 1972, p. 68.
佐伯和彦「ネパール文学史の中での詩の流れ」『会報 No.34』日本ネパール協会, 1979年4月, 4頁。
- (16) Subedi, *op. cit.*, p. 35-37.

尚、佐伯の前掲書、4-5頁においては、モティラムの生没が(1923-53)になっている。

- (17) *ibid.*, p. 19.
 (18) *ibid.*, pp. 20-21.
 (19) ブラムチャリのNo.6は、ポカラの西では奏法が異なる、と言って真似て見せた。開放弦だけでなく、指で押える奏法も用いられていた。
 (20) エクタールそのものは、インド文化圏を中心にいくつかの形態のものが、特定の人たちによって用いられている。
 (21) 藤井知昭国立民族学博物館教授の御教示によれば、ベンガル地方のバウルと呼ばれる遊芸人も一弦琴エクターラを持って、ラーマの物語等を弾き語るという。また、弓奏の一弦琴もあって、トルコからバルカン半島にかけての、グスラールと称せられる吟遊詩人の一弦琴グスラの弾き語りなどがよく知られているという。
 (22) Sachs, Cult, *The History of Musical Instruments*, New York, 1940(1968), p. 56.
 (23) 石井, 前掲書, 295頁。

APPENDIX

ブラムチャリの曲目・和訳

凡例

- この訳文は、ブラムチャリがレパートリィとしている曲目の大意を伝えるものである。各曲目を複数録音したが、その中で、言葉が明瞭であり語り手の記憶のしっかりしているものを選曲して訳出した。
- 繰返し部分は省略した。第1行全体を繰返す場合と、第1行の後半を繰返す場合があるが、その箇所は特に明記していない。
- 地名・人名・神名等の固有名詞は、語られているとおりに表記した。物語における元来の名称とは若干異なる場合が多い。また、同一人物が違った呼び方をされている場合もそのままにした。ネパール語と、ブラムチャリの認識を尊重した。
- 動・植物名は、日本語と未対応のものがあ、それらは現地名を仮名表記した。

ラーマヤン 録音8/29

バル・カンド

- | | |
|--|---|
| <ol style="list-style-type: none"> ゴビンダ, ゴビンダ, ハリ・グンゴウ,
朝から晩まであなたの優しさ讃えます。 あのラオンの悪業で大地は重苦しく,
嘆き心配したヴィシュヌ神が, ダヤフンチャ王家に誕生し,
ジャナム王家にはシーター姫が生れる。 シーターは美しい女性になり,
ラオンの死ぬ日がおのずからくる。 ダサラタ王には子がないためヨゲ(犠牲祭)をした,
腹に子をもつ女がヨゲすれば良い子が生れる。 ケカイという妃にバラタという男子誕生,
スワマントラという妃にラクシュマン,
コウサレにはラームが誕生した。 必ずや大地にナラヤン(ヴィシュヌ)の時代が始まる,
4本手のナラヤンが人々の前に誕生した。 命名式, 聖紐着帯式を盛大に祝い,
教えずともできる見事な弓使い。 手には弓, 背中に箆, 手首にカイダを付け, | <p>タラ, チタル, ゴラル, ガイダさえ狙い撃つ。</p> <ol style="list-style-type: none"> 師ビスワミトラが来てジャナカプールへ同伴した。
途中で出会った鬼が殺され有名になる。 ゴウタムの妃にインドラという男が密通した。
「性病になってしまえ」とゴウタムは言う。 通じられた妃も快感を覚えた,
「されば汝も来世は動物になれ」 「ラームが生れれば2人共死ぬ」と,
ゴウタムは宣告し, 2人を蹴り倒した。 蹴り倒されて2人は死に妃は彼世へ行く,
「不運な私の一生は死ぬのが運命であろう」 ラームの護衛役はラクシュマン, ガンガの辺で,
ナラヤンは足を洗い頭を水に浸す。 「シバの弓に弦を張った人がシーターを嫁にする」
ジャナカプールに着いたラームは考える。 シーターが金の首飾りを手にラームに近寄る,
顔は微笑み心が通じ合った。 強者百人でシバの弓を引っ張って来た,
「吾はヴィシュヌなり」とラームは心に思う。 |
|--|---|

19. 弦を張れば弓が壊れてシーターと結ばれた。
「ジャナカプールに来たラームに心をあずけよ」
20. 弓が壊れて降伏したバスラームは憮然とする。
ラームはアヨドヤの故郷へ帰った。
アヨドヤ・カンド
21. アヨドヤ国では父ダサラタ王が待っている、
人々が嬉しそうに音楽を奏でる。
22. ラーム、ラクシュマン、バラト・サトゥルガン、
勇敢な王子たちがダサラタ王の宝物。
23. 第一の妻がコウサレ、第2の妻はカケイ、
マントウラの言葉を聞き宮廷人の考えが変る。
24. 王様にカケイは自分の気持を告げた、
「ラームを森へ追放して下さい」
25. カケイの言うことを聞き王様は驚く、
「もうこのようなことを言い出すのか」
26. 「だが従わなければ、約束を守らなければ、」
ラームにそのことを告げ王自身は気絶した。
27. 父の言葉を聞いてそれを胸にたたみ、
ラームは出発しようとする、森の中へと。
28. 自分の母の元へと挨拶に行ったら、
母コウサレは気を失った。
29. 息子の顔を見て母は言う、
「お腹がすいたら何を食べるの」
30. 「食べるものは何、寝る所はどこ、
「服が破れたらどうするの、
31. 「行かないで、王宮を離れて行かないで、
「森へ行ったら何をやるの」
32. ラームは母に言う、「心配しないで、
33. 「森の中、服が汚れたら草をまといます、
「全然心配なさないで下さい」
34. 「出発前に暇を下さい、
14年間は何んでもない、14日にすぎません、
35. 「14年間はほんの14日、
「私の不運は父が約束したこと、
36. 「14年間喜んで森へ行きます、
「心やすらかにお暮らし下さい」
37. 「14年間は森で過すのだ」と、
ラームは自分で自分に言い聞かせた。
38. これだけ言ってラームはシーターの部屋へ行く、
シーターに言う「心配しないでシーターよ、
39. 「姑を優しく世話して下さい、
「泣かないで愛しい女よ、
40. 「すぐ帰るから愛しい女よ、決して遅くならない、
「14年経ったらすぐに戻ります」
41. 誠実なラーム・チャンドラは
立ってじっと顔を見詰めていた。
42. 森の中には虎、熊、犀、象、蛇もいる、
宿る所、食べるものとして無い。
43. 涙が止めどもなく流れシーターは激しく泣く、
心の内、いかほど案じられることか。
44. シーターがラームに言うには、
「どうしてあなた無しで生きてゆきましょう、
45. 「あなたは私を残して一人で森へ行おうとする、
「あなたのいない所にどうしておれましょう」
46. 何度言い聞かせてもシーターは聞こうとしない、
ラームがシーターに言うには、
47. 「それならばシーターよ、姑の元へ行きなさい、
「行ってきちんと挨拶をして下さい」
48. 「どうぞお暇を下さい」とシーターは手を合わす、
みずからの気持は胸に秘めながら。
49. 嫁の言葉を聞き姑は泣く、
目から涙がはらはらこぼれる。
50. 「ラームが出奔する上にあなたまで出て行くの」
コウサルヤーはこれだけ云うと気絶した。
51. シーターの方を向きじっと顔を見詰めて、
コウサルヤーは深く息を吸って言う。
52. 「お前には暇を上げない、暇を上げれば、
「王宮内に身内が一人もいなくなる」
53. (だが) シーターは暇をもらった、心を殺し、
気持を押し隠しているが涙が出る。
54. ラームとシーターは暇をもらって出奔する、
母は意識が朦朧となり気を失った。
55. 事態を知ったラクシュマンは言う、
「私も一緒に行きましょう、
56. 「弟を残して兄さん一人どこへ行くの、
兄弟の絆を切らずに一緒に連れて行って」
57. 「森へ行けば心配なことが沢山ある、
「ラクシュマンは今小さい、王宮に居なさい、
58. 「子供だから森には行けない、
「泊る所、座る所、食べる物も無い、
59. 「森の中には猛獣とダナバ（怪物）がいる、
「ダナバは人を食べに来る、
60. ラームとシーターとラクシュマンは、
王宮を出ると人々に告げた。
61. 「父の命令を頭に刻み、
「そろりそろりと14年間森に参ります」
62. ラーム・チャンドラ、ハリー・シバ神は、
人々は話を聞き皆でこう言ってます。
63. 「行かないで下さい、アヨドヤ国の名高き人よ」
アヨドヤ国の人々は皆泣いた。
64. アヨドヤ国の人々は泣いた、
涙がはらはらとこぼれ落ちた。

65. 「わが愛する人々よ、なぜ泣くのか、
「涙をそんなにこぼさないで下さい」
66. 自分の古い弓と矢を持って、
ラームは行く、木のおい繁った森へと。
67. こうして飄々と亡命の旅が始まった、

- ダサラタ王の心は重く気懸りだった。
68. 胸に手を置き、ラーム、ラームと言って気絶した、
心労の余り、ダサラタ王は亡くなった。
69. 誰もいない町、アヨドヤ国はひっそりと、
皆涙に暮れている。

クリシュナ 録音8/28

クリシュナ・ジヴァニイ

1. 日夜あなただけを讃えよう、クリシュナよ、
今このような時代になぜ生きてきたのか。
2. クリシュナ・ゴヴィンダ、ムラリ、
ナート・ナラヤン、バスデヴよ。
3. ウバジャンの娘がバスデヴに嫁いだ、
お土産を詰めて親戚中が集った。
4. 結婚式が始まった、花の首輪を作って、
デヴァキー（娘）が嬉しそうに首にかける。
5. 金品や贈物を沢山贈った、
カンサ（娘の兄）がデヴァキーを送って行く。
6. ブラフマンがヴェーダを晴やかに誦ず、
道中カンサの耳に天からの声（「妹の8
番目の子がお前を殺す」という予言のこと）。
7. 我身を守るため妹を殺そうとする、
神も許ぬこと、止めよと人々が叫ぶ。
8. 「兄さん殺さないで、来世が不幸になります、
「子供ができたらすぐ知らせます」
9. 「誠の約束を3度繰り返します、
「子供ができたらすぐ知らせます」
10. 1人2人と子が生れ、6人の子供ができた、
バスデヴとデヴァキーは約束を思い出す。
11. カンサの元へ子供を連れて行った、
バスデヴとデヴァキーは子供を送って行った。
12. 王宮広場に大きな叩き石を設えさせ、
6人の甥を全部殺した。
13. 子供の足を握って放り投げた、
父バスデヴは気絶した。
14. バスデヴを牢獄に連れて行った、
1人2人子が生れ、7番目の子供ができた。
15. バルラムが生れた、
7番目の子供もどこかへ行ってしまった。
16. 7番目の子供のあと、8番目ができた、
8番目の子供バガヴァンが生れた。
17. バドラ月クリシュナ・パチェのアスタミの日に、
ゴグルへ行くためにクリシュナは生れた。
18. 涼しい雨が注いでいるが心はカンサに怯える、
- 広場から部屋まで扉を閉めて鍵をかけた。
19. 子供をトカリ（籠）に入れて、
バスデヴは運んでゆく。
20. 扉は自然に開き軍隊は眠ってしまった、
バスデヴは子供をゴグルへ運ぶ。
21. バドラ・マスク川やジャムナ川は広くて大きい、
クリシュナはそれを見て（川を）浅くした。
22. 涼しい雨が注いでいるがカンサが恐ろしい、
ひたすら歩くとゴグルにヤシュダの家がある。
23. クリシュナがピタマリ（インド風下ばき）姿、
なんという所に神様がお生れになったことか。
24. 息子をやって娘をもらった（交換した）、
娘を持ってきて「この子を膝に抱け」と言う。
25. 軍隊が眠りから覚めると、
子供の声が聞えた。
26. のそりのそりとカンサの元へ行く、
「牢獄で子供が生まれました」
27. 「8番目の子供が牢で生まれました」
カンサは立ち上がり軍隊が前後に付く。
28. デヴァキーに子供を出せと言う、
デヴァキーは手を合せて言う。
29. 「自分のためにも子供が欲しい、
「娘だから恐れずとも良いでしょう。
30. 「娘には何もできない」
デヴァキーの8番目の子供がカンサの目的。
31. 力づくで子供を取り上げ、
力づくで子供を膝から取り上げ、
32. 牢から外に持って行き、
マヤ・デヴィ（女子の名）を殺そうとして、
33. 方々の人を呼び集めた、
方々の人は皆思う「なんと不運な女の子よ」
34. 足を持って振り回し殺そうとした、
マヤ・デヴィは手から離れ天から声を出す、
35. 「私の名はビジュリ、女の神です、
「お前が殺そうとする者はゴグルに」
36. 「私は女神、あなたには殺せない、
「お前に殺される人はゴグルに」
37. 真夜中丁度12時に扉が開いて、

- 軍隊は眠ってしまっていた。
38. クリシュナはゴクルにいる、
これを聞いてカンサは、
39. 心に恐怖を覚える、
たちまち牢獄が怖くなる。
40. 夢だと思ったカンサは、
王宮へ大臣兄弟を呼び集め、
41. 集めてその話をする、これからどうすべきかと、
皆に聞かせる、空から声の聞えたこと。
42. 「私の時世は終りかけた、
「デヴァキーの腹から出た子が私を殺す」
43. あちこち捜して見つけたブタンという女、
その乳房に毒を塗りゴクルへ送った。
44. 神様だから人の心がわかる、
女の来た目的が知れて子供は這い廻る。
45. クリシュナの身体に強力な蛇が入った、
ゴクルの赤ん坊は毒の乳で皆殺しにされた。
46. いよいよクリシュナの元へ行く、
生後7日の子供が抱かれて毒の乳を飲む。
47. 毒入りの乳を飲まされた、
音を出して乳を飲んだ。
48. ブタンという女が死んだのはこの時、
乳を飲ましている間に眠ってしまった
(=死んでしまった)。
49. 不明
50. カンサはそれを聞いてびっくり、
カル・バネという怪物が呼び出された。
51. 「本当にクリシュナがブタンを殺したのか、
「できるなら、お前たち行って彼を殺せ」
52. この国の人々は皆殺されてしまう、
大戦に勝った前歴の象アジュマルが呼ばれ、
53. 軍隊が呼ばれた、
どうやってもクリシュナを殺せない。
54. ヨゲ（犠牲祭）をやってクリシュナを呼ぼう、
広場に来た時窓から矢で殺す気だ。
55. 広場で矢を用いて殺そう、
心にそうした計画を秘め、
56. 100人のバウン（僧）が呼ばれた。
クリシュナのおじはアクルという名、
57. アクルを王宮に呼んで言う、
「行ってクリシュナを連れて来なさい」
58. (思うに) もしそれに従わなければ、
カンサに殺される恐れ、わが甥をどうしよう。
59. 「呼びに行きます、
「私が呼んで来ます」
60. クリシュナと弟のバルパドらはガンガ川で、
ヤムナ川で遊んでいるところ。
61. 遊んでいるのを見つけたおじアクル、
クリシュナはおじを見つけてその前へ行く。
62. ヴァス・クリシュナに（王の命を）伝えないと、
カンサ・スルの命令を伝えないといけない。
63. お前を殺そうとヨゲを準備している、
マトゥラという所でカンサが用意している。
64. そこに行けば必ず殺される、
この国には心配事があまりに多い。
65. これを聞いたクリシュナは言う、
おじさんのヨゲへ参ります、
66. 「もし寿命が無いものなら、
「ここにいっても死んでしまいます」
67. その時おじは言う、
クリシュナの顔を見て云う。
68. ラタ（馬車）をきれいにしている間、
足を乗物に乗せ、招きに応じようとした時、
69. 丁度その時1600人の恋人が前に来て、
「心の冷たい人ね」と云う。
70. 「あなたの心は優しくない、
「私達1600人を置いてゆく」
71. 1600人の恋人の声、
クリシュナの耳に届かない。
72. 耳に聞えない、ゆるりゆるりと出発する時、
クリシュナの母が1600人を呼ぶ。
73. 「息子が行かないようにして」
すると母デヴァキーの前へ進み出て、
74. 「私の名で一旦ヨゲが成されたからは、
「呼ばれれば行かねばならない、
75. 「行きます」と言って馬車に乗る。
目を涙でいっぱいにしてデヴァキーは言う、
76. 「もし行くなら皆（1,600人）を殺してから、
「マトゥラに行って」
77. この母の言葉を聞いたクリシュナは、
「心配なさるな」と母に言う。
78. おじを強いて急がせて車に乗せ、
自らも馬車に乗った。
79. とある所に仕立屋がある。
仕立屋に3人分の服をくれと言う。
80. 「母方のおじから呼ばれているのだ、
「王様のヨゲに行くのに甥子たちが、
81. 汚れた服を身にまとい、
「汚い乗物で行くのは恥しい」
82. それを聞いた仕立て屋は、クリシュナの足元に、
頭を下げて畏まりましたと言う。
83. 「汚れた今の服をぬいで下さい」

- クリシュナは長生きせよと祝福を与える。
84. 「100年生きても、
あなたの優しさは忘れまい」
85. 先へ行くと庭で女の子が2・3人花摘みの最中、
花はヨゲのためであること一目瞭然。
86. 「カンサ・スルのヨゲのために、
「捧げる花です、この花は」
87. 花摘みを見てクリシュナは言う、
「ねえ庭師のお姉さん、
88. 「私達は母方のおじのヨゲのため
「ねえ、庭師のお姉さん、
89. 「私達にどうか花の首輪を（下さい）、
「このような花を付けてゆきたいのです」
90. クリシュナがこう言ったのに、
庭師の姉さんは「上げないよ」と言う。
91. 「カンサ・スルのために摘んだ花、
「私達の有名な王様のヨゲのためのもの、
92. 「あなたみたいなつまらない人のために、
「取って作った花の首飾りじゃないのよ」
93. これを聞いてクリシュナと弟は困った、
そこで庭師の姉さんを掴んで投げた。
94. 掴んで投げた、そして、
花の首飾りをクリシュナと弟は身に付けた。
95. 花輪を首にかけて行った、
先へ行くとそこには2人の洗濯屋、
96. カンサ王の服を洗う洗濯屋、
「洗濯屋さん、服を1着ずつ、
97. 「下さい、私達が着てゆく服、
「私達のおじがヨゲを用意しているから、
98. 「ヨゲを準備しているから
「呼ばれて来たのです」
99. すると2人の洗濯屋は、
冷たい言葉で言った、
100. クリシュナと弟に言った、
「お前たちのような（つまらない）者が、
101. 「これを着たら天国の気持だろうよ」
こんな風に相手に言うと、
102. 大層怒って2人の洗濯屋を、
クリシュナと弟バドらは、
103. 掴んで潰した、そして
きれいな服を捜して身に付けた。
104. 2人の洗濯屋を殺して行った、
このことはカンサに直ぐ知れた。
105. 村の人々を呼びクリシュナの事を聞かせる、
大戦に勝った象をクリシュナを殺すため送る。
106. 狂った象がやって来た、
クリシュナを殺すためにやって来た。
107. 弟が象の前へ行く、
そして象にまたがった。
108. 象が鼻で乗った人を巻く、
クリシュナを殺そうとして。
109. バドらは象の前へ進み出て、
象の鼻から入って尻から出て来た。
110. 前にクリシュナ、尻にはバル・ラム、
2人の兄弟は鼻を持ち、
111. クリシュナは鼻を掴んで、
バル・ラムは尻っぽを持って、
112. 2人で鼻と尻っぽを持ってぐるぐる廻して、
投げた、大きな音がドスン。
113. そこからバル・ラムは
王宮広場へと行く。
114. 広場に着くと、そこでは、
クビダという女、香木を擦っている。
115. 「おばあさんよ、
私達も香を頭に付けたいのだが」
116. この言葉聞いておばあさん、
たちまち本性を現わした。
(ここでストップした。これ以上覚えていないのか、このあたりで中断するのが慣例であ
かのかは不明。)

アルジュン・ギータ 録音8/29

ガルブ・ヴァス

1. アルジュンよ、よく聞け、心を開いて良く聞け、
ダン（喜捨）すれば良い人になる。
2. 雌牛10頭より、雄牛1頭の方が良い、
雄牛1頭差し出す方が功德が大きい。
3. 100頭の牛より、カンヤ（生娘）の方が良い、
生娘のダン、畑のダンが功德となる。
4. 2ムリの稲差し出すこと、養女を差し出すこと、
- 2つは同じこと、アルジュンよ良く考えよ。
5. 100ムリ以上、畑を差し出せば、
来世では賢く幸せ者になれる。
6. 自分の家にあるもの、それで十分と思え、
他人の金が自分に入ると思うな。
7. 他人の金を借りて、返さないなど、
アルジュンよ、ごまかしは来世に良くない。
8. 貸してもらった時はペコペコ、返す時は顔も見ない、
娼婦のところで使ってしまう。

9. アルジュンが手を合わせて云う、ハレー・クリシュナ何も（良いことを）せずして、来世に行くのは困難。
10. そうした人の子供たちが、悪い人になる、
そうした人の顔を見ただけで不幸になる。
11. 早朝に沐浴をする、だがそうした人の顔を見たら
沐浴をやり直すことだ。
12. 最初に太陽を見たら、その日は幸い、
1度ババ（悪業）したら来世で病気になる。
13. 2度ババしたら、子無しになる、
1000度ババしたらライ病になる。
14. みずから1度ババすれば、来世で啞になる、
啞か甲状腺肥大症か癩になる。
15. 来世では何も持たない人になる
繰り返し
〈これよりガルブ・ヴァス〉
わかるように言おう、心開いてよく聞け、
16. 妊娠している時のことを、手短かに話そう、
塩味の強いものや唐辛子を食べると、
17. 腹が熱く、火がついたようになる、
ジェスタ月、陽差しは強く身体がはてる。
18. 女が手を合わせて云う、助けてと、
10ヶ月間が懐妊状態。
19. 闇い所に10ヶ月、何も見えない状態、
いつこの母の苦勞への恩返しをしようか。
20. 大きくなったら、ハレー・シバ、よく考えよう、
（次は不明）
21. 私のお母さんの優しさは偉大、
子供を生む時は両手を握りしめ、
22. 10ヶ月お腹に入れて、出産する母親、
見ている者は死んでしまうかとも思う。
〈以上でガルブ・ヴァス終り〉
23. 皆さんどうするのか、誰かを親戚兄弟と思っている、
が、人が死ぬ時、誰も一緒には行かない。
24. 木組みの台に、死体を寝かせて、
死んだ人と生きている人は別れる。
25. 裸で生れて裸で死ぬ、何も持たずに、
お金が沢山あろうとも持っては行けない。
26. この世で「自分のもの」と言っても意味のないこと、
子供の頃よりそうしたことを考えよ。
27. 死体に供物や色粉等、供えられている今、
自分のものという概念は最早無い。
28. 金のお皿に真白い、香料を入れた燭台、
その時には友達も誰もいない。
29. いくらダンをしようと、ダルマを成しようと、
神の名を唱えることには及ばない。
30. だから神の名を唱えること、それを選べ、
神の名さえ唱えればこの世は暮らせる。
31. だから神の名を唱えること、それを選べ、
センスのあるジョークを私の兄に与えよ？
32. 地上に生きる者皆、ラーム、ラームと唱えよ、
家にある金のことを考えず神の名のみ唱えよ。
33. バッチミ、ラクシミ、サラソテ・マイ、
その名のみを口にする人は輪廻をしない。
34. 花が咲き考えが開く、花が萎めば考えも屑となる、
自分が美しいなどと思う人も、
35. そうした者は、（神の名を）忘れる。
どうしてこの者が（天国への）川を渡れよう。
36. バクタ・マル・ブラサド（ヴィシュヌの師）、
その名は不滅、
（ヴィシュヌを讃え続けた）ドゥルバと同じ行いをせよ。
37. 行う行う、皆でうちそろって行う、
わが師の名と共にハリー、ハリーと唱えよ。
38. 人は心でいつも祈ろうと、思ってもできない、
祈ろうとしてもやり方がわからない。
39. 子供の頃遊んで暮らして、神のことを知らないから、
どんだん年をとってしまったから。
40. 年をとってしまったから、神のことを考える、
ハリーという名をどこで唱えれば良いのか、
41. 年をとって（死ぬ時）初めて、神の足を持って、
ハリー、ハリーと助けを求める。
42. 従兄弟は泣き、兄弟は手を取って、
両親は（死者の）膝の下に頭を置いて泣く。
43. 竹の籠に乗って、白布に包まれ、
私のもの、と頑張っている（全部おいて）あの世へ行く。
44. 兄や弟、姉や妹が泣いても、仕方のないこと、
死んで13日目から悲しみも薄らいでゆく。
45. 父母のために何かを、やって上げる気持、
母親から水の如く乳を呑んだ。
46. そのことを、心に留めて、
この世での良い説教を聞かせたのだ。
47. 信仰心を敷き物に、信仰心を上掛けにして、
信仰心を枕にしなさい。
48. 信仰心も消えて（無になり）、火葬場へ行く、
火番の者も家へ戻った。
49. 火葬場でピンド（供物のおにぎり）を上げて、
父のためピンドを上げて、
50. 火葬場でウバダヤの前へ行きピンドを開け、
10回マントラを読んで、ハレー・シバを唱える。
51. アルジュン・ギータを、頭から最後まで聞かせた、

十分に心ゆくまで聞かせた。

52. この歌を聞く者は、この世から天国へ渡れる、
ラームの名を唱えて死にたいもの、いのちを終ら

せたいものだ。

(以上は第1行の後半を繰返す)

パス・ウパカル 録音8/30

(動物から人への訴え)

1. 聞け、聞け、王よ、人よ、皆良く聞け、
人の栖む所が恐しく危険な所となった。
2. 聞け、聞け、王よ、人よ、皆良く聞け、
兄弟を殺して食べるとはどういう気か。
3. 肉を食べる人の心には、優しさが無い、
死ねば全てが神の元へ行くというのに。
4. 肉を食べる諸兄よ、地上を恐ろしい場所にしないで、
我々身寄りの無い者愚かな者を殺しても無意味。
5. 来世で、その応報をしなければならぬ、
皆よ、来世では必ずその報いがある。
6. 誰でも知っていて、そうしたことをする者は、
ラームがみずから彼等に罰を下す。
7. 8億4千万回? 転生して、今動物になった、
次々と休むことなく変ってククリで殺される。
8. 全ての世代が皆、ククリで殺された、

- この生命の時間も(いつ果てるか)分らない。
9. (自分も前世で) 同じことをして、悲哀を背負った、
種々の動物に変わって、今又動物になった。
 10. 皆さんは兄弟であるはずの、私達の肉を食べる、
兄よ、あなたの息子が殺されたらどう思うか。
 11. あなたの息子や娘が殺されたら、どのような悲しみが襲うことか、
私達の子供の肉をいつまで食べるつもりか。
 12. クマールという男のろくろが廻るように、
時代も変わる、
* 4日の生命に悪業をなさないで。
 13. 心を開いてラームの名を唱えよ、
* 自分下女と思ひ、今宵からそうしたことを止め
にせよ。

* 2日、4日は「短い」ことの譬喩。

※下女 sekhi は時には妻のことを指す。

バブ・レ・チョリ・マレコ 録音8/30

(父が娘を殺した話)

1. 聞いて下さい、ハリー・シバよ、心開いて、
ハリー・ブラサドというブラフマンの事件を。
2. ネパール暦2034年(A.D. 1977年)マンシル月、18日
月曜日に、
3. チェウチェ地区の、マロ・バネ・ゴという村に、
自分の娘を自分で殺した男ハリー・ブラサド。
4. 賭博に家も畑も、全てをかける。
娘を殺しその品物をかけよう(と思った)。
5. マロ村に3人の男、賭博をしにやって来た、
チェウチェの森へ行き賭博をする。
6. 最初の日の賭博では、7000 Rs 勝った、
翌日も勝つと思ったが家も畑も失った。
7. 2人の妻たちは自分で、暮してゆかねばならない、
第1の妻は、あゝシバ神よ、何も言わない。
8. 第2妻は嫁いってから、まだ1年経っただけ、
そのお皿に(勝負を夢想して)飯を投げつける。
9. 第2妻は言う、止めて下さいだんな様、
言っても聞いてくれない、どうして暮そう、
10. 家にあるもの皆無くなったら、生活はどうするの、

そこを考えて賭博もやって下さい。

11. 300ムリの糶の取れる、畑があった、
まだある、まだある(と思う内に)、
12. 3日で畑が、無くなった、
狂って村中を歩き廻る。
13. 止めて下さい、あゝシバ神よ、賭博とカードを、
自分の財産を潰し、生活は窮乏する。
14. その男には、2人の息子と3人の娘、
* 3番目の娘が、SLCの試験を受ける頃、
15. 1番目の娘は、バンディットの家へ嫁ぐ、
2番目の娘は、隣村に嫁いでいる。
16. 隣の村の娘は金持ち、2才の子がいる、
自分の財産が無くなった、何を食べてゆこう。
17. 7頭の去勢牛と、30頭の水牛がいる、
25頭の雌牛がいて14頭の去勢山羊がいる。
18. その財産が、チェウチェの森で無くなった、
これから行って2番目の娘を呼ぼう、
19. これから直ぐに行って、連れて来よう、
殺そう、なんとナイフで殺そうとした。
20. そのようなことを考えながら、娘の家へ行く、
娘は幸せそうに座っている、ほらあそこ。

21. 邪な考えを胸に、娘に言う、
偽って、母さんが病氣だ、すぐに行け。
22. 座っていた娘を、直ちに連れて来た、
そこで娘の一生は一巻の終り。
23. おもむろに、チェウチェの森へ連れて来た、
1本のガジュマルと1本の菩提樹のある所。
24. 道の下に、湧水が流れている、
娘の一生はそこまでだった。
25. 突然ナイフを、腹に突き刺した、
水、お父さん水、と言う、まだ父を信じて。
26. 3時間気絶して目覚め、水、お父さん水と言う、
そのままでも既に絶命、男は何も考えず、
27. あゝシバ神様、又してもナイフを手に取り、
再びナイフを突き刺した。
28. 非情な人間、水を呑んだかとその人は言う、
又しても首のところへナイフを突き刺す。
29. なんという父親か、非情なる男、
自分の娘を殺すために生んだ父親。
30. 3時間経って、まだ死んでいない、
もう殺さなければいけない。
31. 娘が付けている、頭の飾り物は7半トラ、
娘の一生はそこまで。
32. 娘を殺して飾り物、全部を包みにした、
父の心にある賭博への思いは大きい。
33. 落葉で死体を隠し、もう行うと思いつつ、
草置場の草の下、5分間様子を見る。
34. そこへ、あゝシバ神様、偶然のこと、
ラウレ（兵役を済ませた人）がやって来た。
35. 道は血まみれ、何の血かといぶかる、
ラウレたち、あちこち捜して廻る。
36. ラウレは走って行き、ブラーマンを捕えた、
ラウレの1人は警察の役人、走って捕まえた。
37. 警棒で叩いて、連れて行った、
非情なる人間は、やれやれ、牢獄へ行く。
38. サリーの色は原色の青、ブラウスはポリエステル、
39. 血の色は水で洗える、母親は家で泣いている、
40. 思えば、身体が熱くなる、
ハリ・ブラサドの刑務所行きは確実だ。
(一行目の後半を繰返す)

* S L C = School Leaving Certification 高校卒業試験